

.38 CALIBER REVOLVER

.38口径リボルバー

法を守り、市民を護ってきた軍用・警察用.38口径ダブルアクションリボルバー
Report by Ken Nozawa 図版解説/鈴木健太郎

Cover Photo
WPP Archive
© WORLD PHOTO PRESS 2024
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

- 004 第72回 **サイゴン物語 Saigon Memories**
MACVがいたベトナム戦争「入口から出口まで」[21]
- 008 **ベトナムを遠く離れて——。**
嗚呼、M1カービン! 文/小倉徹
- 042 **ベトナムで戦ったオーストラリア軍の兵士たち**
王立オーストラリア連隊編②
- 048 **SHARK SHOOTER LIVE-FIRE REPORT! 特別編 第1回**
アメリカ国内メジャー・マッチ参戦までの道
~キャリア・オブティックへの挑戦。ダット・サイトの使い方をマスターする~
Report by Muneji Samejima
- 056 **ウエスタンアームズ新製品リポート**
Report by SHOTGUN MARCY
●スミス&ウエッソン M4013TSW CBHW Ver.
- 059 **タナカ・ワークス新製品リポート**
Report by SHOTGUN MARCY
●S&W M10 ミリタリー&ポリス 2インチ
.38スペシャル スクエア・バット/HW Ver.3
●SIG P226 レールド・フレーム
エボリューション2 オールHW
- 062 **トイガンニュース**
ウエスタンアームズ
●コルトMkIVシリーズ80 ワイルド・ホーク 2024Ver.
タナカ・ワークス
●PEGASASIIガスガン・シリーズ コルト SAA 2nd
ジェネレーション 4-3/4インチ ABSニッケル・フィニッシュ
C.A.T. ジャパン
●C.A.T. Versatile PCC “JSC Version”
マルゼン
●ワルサーP99FS CO2 スペシャルフォース
- 068 **Militaria Roundup!**
ベトナム戦争のヘリ・クルー・ユニフォームと40mmグレネード・ベスト
- 074 **東京マルイ**
14歳以上推奨 電動ガンRシリーズ第1弾 **M4A1R**



月刊 THE グリーンベレー GREEN BERET

特殊部隊CIC中隊特集 Part10 解説/DJちゅう

- 079 **ニッポンのちからこぶ** 写真・文/菊池雅之
- 084 **IPD24 Indo-Pacific Deployment 24**
- 088 **サバゲ三等兵APS部**
名店探訪! 秋葉原、モデルガンの聖地
大雄ホビーショップ
- 090 **新製品情報 COMBAT mono**

COMBAT FRONT LINE

- 078 今月の中田焦点! WW2レプリカ アメリカ海軍
デニムジャンパー & デニムトラウザー
- 086 ポスゲリラ参戦! イベントリポート
福島県 R-GUNStudio 10周年記念イベント
& RSF富士1周年記念イベント
- 092 新作映画情報「ジガルタンダ・ダブルX」
「ヒットマン」「憑依」
- 091 レアミリタリーテクノロジー
- 093 読者プレゼント & CIC
- 094 バックナンバー
- 095 次号予告&奥付

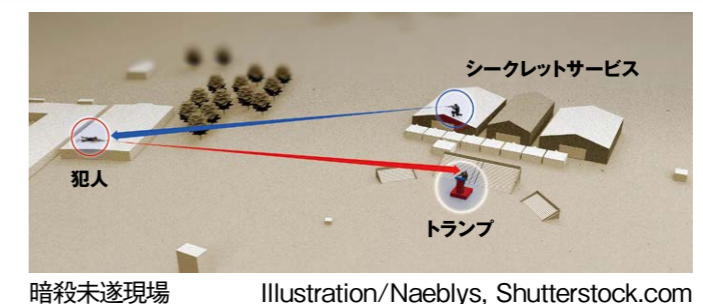
"Exclusive Trump Photo: Personalized Autographed"

This one-of-a-kind autographed photo of President Trump is personalized with your custom message. An iconic keepsake for true supporters.

Get your personalized autographed Trump photo today!

BUY NOW

ORDER NOW



ミリタリースポッター

On July 13, 2024, former U.S. President Donald Trump was shot in Meridian, located west of Butler, Pennsylvania.

The former president was shot in the right ear but survived without life-threatening injuries. The perpetrator was shot and killed by a sniper from the Secret Service's Counter-Assault Team. AP photographer Evan Vucci captured the scene, and the photo on the card above is from that moment. The card is currently available for purchase with a personal message at the Trump 2024 Store. For more details about the AR-15, see the cover feature of the October 2022 issue of Combat Magazine.

2024年7月13日、ペンシルベニア州バトラーの西に位置するメリディアンで、ドナルド・トランプ元アメリカ大統領が狙撃される事件が起きた。元大統領は、右耳を撃たれたが命に別状はなかった。犯人はシークレットサービスの対襲撃部隊のスナイパーにより射殺された。この現場をAPのカメラマンであるEvan Vucciが撮影していた。上のカードの写真がその時のもの。現在、このカードはTrump 2024 Storeにて、パーソナルメッセージ入りで購入できる。AR-15については本誌2022年10月号の巻頭特集で詳細解説している。

Source/Trump 2024 Store

.38 CALIBER REVOLVER

.38口径リボルバー

法を守り、市民を護ってきた
軍用・警察用.38口径
ダブルアクション
リボルバー

Report by KEN NOZAWA

相手を制するのに今ほど力を必要としなかった
19世紀の終わりに登場し、瞬く間に普及した
.38口径ダブルアクションリボルバー。
この銃が成功した背景と積み上げて
きた実績を、時代の変化を
踏まえながら振り返る。

図版解説／鈴木健太郎
Illustration／M.kelly
Photo/U.S.ARMY,USAF,
U.S. Bureau of Alcohol,
Tobacco, Firearms and
Explosives, United States
Department of Energy,
Library of Congress, NARA,
Smithsonian Institution,
Bundesarchiv, Lawrence Denny
Lindsley Photographs, WPP Archive

優位性を求めて 誕生したリボルバー 世界で愛用されてきた その理由とは

これまで本誌の「実銃シリーズ」では軍用として採用された名銃を紹介してきた。半自動ピストル、サブマシンガン、アサルトライフル。そしてバトルライフルも軽機関銃も数種を解説してきたが、そんな中、採り上げてこなかった機種にリボルバーがある。

「軍用拳銃にリボルバー……？」

そんな疑問を持つミリタリーファン、ガンファンも多くいると思われる。軍用のサイドア

ムスといえば半自動ピストルという常識があり、そこにはリボルバーが入り込む余地はない。確かに今日の世界各軍を見渡すと、リボルバーを制式採用している国は皆無だ。もちろん、特別な場合において、もしくは少数の国で採用している可能性はあるが、少なくとも主要国ではない。それは法執行機関でも同じで、アメリカでは1970年代まではボリス用ハンドガンといえばリボルバーが主流であったが、1980年代の中頃には多くの州、警察署で半自動ピストルの採用がなされている。

以上のような現実はあるが、時代を遡ると、リボルバーが軍用拳銃として活用されてきたことも事実である。

現在では姿を見ることがなくなった軍用、

そして法執行機関でのリボルバーには、どんな機種があったのか？ また、なぜ、軍、法執行機関でのリボルバーの地位は失墜し、半自動ピストルに取って代わられたのか？ 何となく分かる気もするが、明確な理由までは分からない……といった声もあると思われる。そこで、今回はマイナーとなってしまった軍用リボルバー、法執行機関用リボルバーとはどんな存在であったのかを見ていきたい。

過去には活躍していたリボルバーが、気がつけば見かけなくなってしまった裏には明確、明瞭な理由があるはずである。

そこでここでは、最初にその辺の事情、理由と、過去に主要各国で採用されてきたリボルバーの紹介から始めてみたい。

.38 CALIBER REVOLVER



ウェブリーMk.I(イギリス)

中折れ式と呼ばれる排莖機構とダブルアクションを取り入れた意欲的なデザインは後のエンフィールドにそっくり取り入れられる。

ウェブリーMk.VI

6インチと長くなった銃身が特徴。

トップブレイク(中折れ)の状態となったウェブリーMk.VI。ウェブリーとエンフィールドは銃身部とフレーム部が折れ曲がるとエジェクターが飛び出す構造になっている。

ウェブリーMk.VIの.45ACP弾仕様。455ウェブリー弾と.45ACP弾は寸法がほとんど変わらないため、どちらの仕様かを外見で判別するのは少々難しい。

M1879 ライヒスリボルバー(ドイツ)

目新しい機構はないが非常に丈夫で、1883年には銃身を短くしたバリエーションモデルが登場している。どちらのモデルも少数ながら第二次大戦終結まで使用例がある。

ボデオ モデル1889(イタリア)

トリガーガードがないという現在の設計理念とはかけ離れたデザインが特徴のリボルバー。ただし安全面が考慮されていない訳ではなく、トリガーが折れたみで、トリガーを完全に引ききらないと撃発しない機構を持つ。

MAS M1873(フランス)

軍の近代化の一環として採用されたダブルアクションリボルバー。シリンダーは固定式なので、素早い装弾や排莖は難しい。

Le Mat(1856年 フランス)

シリンダーの軸が散弾用の銃身を兼ねるという独自の機構を備えたリボルバー。シングルアクションながら一挺で異なる口径の弾が発射可能というコンセプトは大きな反響を呼び、南北戦争や普法戦争で用いられた。

.38口径リボルバーの実力と可能性

トータル性能の高さが採用を決定

過去に世界の各軍で採用してきたリボルバーの紹介も一通り済んだところで、ここでの主役である.38口径リボルバーの紹介に移りたい。最初に、なぜ.38口径が選ばれたのか？から話を始めよう。

米軍が最初に採用した.38口径リボルバーはコルトM1889であった。その後、M1892、M1895と.38口径が続く。性能面から見て失敗作ではなかったと思われるが、アメリカ-フィリピン戦争において非力さが指摘され、そこからM1911開発へとつながっている。

では、なぜ、.38口径の非力さが指摘されながらも.38口径リボルバーが生き残ったのか？それは実包の新規開発が絡んでくる。

コルトM1895の使用実包は.38ロングコ



公園の管理人と小鳥の奇妙な眺め合い。管理人が手にしているのはS&W M10の5インチモデルである。M10はS&W製リボルバーの代名詞と言うべき製品で、銃身長は4インチと5インチのほか2インチ、2.5インチ、3インチ、6インチと多くの種類がある。S&W社のリボルバーはコルト社製と比べるとやや耐久性に劣るもののダブルアクションとスイングアウトの機構は完成度が非常に高く、時代が進むにつれて「耐久性のコルト、操作性のS&W」という評判が根付いていった。1924年 レーニア山国立公園

ト弾で、これは.38口径弾ではあるが、その非力さが知れるとS&W社は威力を増した新たな実包の開発を進めた。そこで誕生したのが.38 S&W スペシャル弾だ。今日、一般的に.38スペシャル弾と呼ばれ馴染みのある実包の前身である。

初期の.38 S&W スペシャル弾は.38ロングコルト弾と比べ25%ほどのパワーアップが成され、弾頭重量は150グレインから158グレインと重めの弾丸を使用しており、ストップングパワーは大きく改善されたことになる。また開発当初は黒色火薬を使用していたものが無煙火薬仕様へと切り替えられ、更なる改良・発展が見られた。

そんな.38スペシャル弾に訪れた大きな変化は発売から約30年後だった。世界恐慌と禁酒法の時代には自動車による強盗が増え、アメリカ銃器メーカーは当時の分厚い自動車ボディや初期の防弾チョッキを撃ち抜ける拳銃弾の開発を迫られたことから生まれたのが.38/44ヘビーデューティだ。これは元々、.44スペシャル弾用に設計された大型リボルバーでのみ使用することを想定していたことを示している。ただ、その新弾は通常の.38スペシャルと同じ大きさだったためKフレームのミリタリー&ポリスでも使用可能というもので、問題発生の可能性から更なる改良実包として完成したのが.357マグナム弾である。広く知られているように.357マグナム弾の薬莖寸法は.38スペシャル弾薬莖よりも長く、Kフレー



S&W M10の4インチあるいはそのコピー品で武装したフランスの民兵。軍や警察で用いられる.38口径リボルバーはメーカーに関わらず4インチモデルが一般的で、ヨーロッパでは第一次大戦から第二次大戦にかけて様々な半自動ピストルが登場しリボルバーの影が少なくなっていくのだが、興味深いことにドイツの国家元帥ゲーリングはS&W M10の4インチを終戦まで所有していた。1944年 フランス

ムのミリタリー&ポリスへの装填はできず、物理的に問題発生は食い止められた。

.38スペシャル弾の改良は威力のみに限らず、弾丸(弾頭)の試験も多数行なわれ、総合的に機能性、ストップングパワーの向上が図られたのだ。

改良・発展が進むと、1970年代初頭に登場した新しい仕様の.38スペシャル弾薬が波紋を呼んだ。

158グレインの鉛製セミワッドカッター・ローポイント弾を+P仕様の高圧で発射することで、扱いやすく、かつ威力の高い実包が完成されたのだ。最初にセントルイス警察署が使用すると、続く形でアルバカーキ、シカゴ、ダラス、マイアミなど、他の大都市の警察署も追随し、さらには連邦捜査局(FBI)も採用したことで、その弾薬は「FBI弾」と呼ばれるようになった。

ただ、同実包は「非人道的なもの」「殺傷力が高すぎる」と批判もされたが、大都市の警察署やFBIの採用実績から法執行機関での使用が合法化されていった。

その後も.38スペシャル弾の研究・開発は進められ、軽量高速弾の「110グレイン +P+ JHP弾」も誕生している。これは.357マグナム弾を法的に禁止している州や警察署でも採用され、.38スペシャル弾の市場を拡大させることとなった。

結局のところ、扱いやすさ、コストの低さといったメリットが認められて採用された.38口径の実包は、誕生から常に改良・発展が繰り返

れ、軍用としても、特に法執行機関、ポリスたちにとって必要十分な性能の実包へと変化していった歴史にたどり着く。

もちろん、実包の小型化は拳銃(リボルバー)本体の小型化・軽量化にも結びつく。リボルバーの場合、回転式弾倉(シリンダー)を有するため、実包が大きく(太く)なると直接的に本体が大きく重くなってしまいうという事情がある。

軍用として、法執行機関用として.38口径リボルバーが広く用いられてきた最大理由は、言ってしまうえば性能やサイズ、コストの面から最適だったからである。

◆ やっと、今回の主役である5種のリボルバーの紹介に入るが、それに合わせて製造銃器メーカーについても簡単に知ってもらいたい。最初はS&W社である。

スミス & ウェッソン社(=Smith & Wesson Manufacturing Company)は1852年にホーレス・スミス(=Horace Smith: 1808年10月28日~1893年1月15日)とダニエル・ベアード・ウェッソン(=Daniel Bai

パトロール中の2RARの兵士たち。彼らは主カライフルのL1A1に加えてアメリカから供与されたM79グレネードランチャー、M72対戦車ロケットで武装しているが、これらの武器はオーストラリア軍部隊にも好評で、この戦いを機に制式品となる。ベトナム戦争ではオーストラリアと同じ英連邦国家のニュージーランドが少数ながら戦闘部隊を派遣しており、王立オーストラリア連隊の第2大隊、第4大隊、第6大隊に付属する形で戦ったため第2大隊の写真にはニュージーランド軍兵士が写っていることも少なくない。



王立オーストラリア連隊第2大隊の紋章。第2大隊は背景色を黒とした連隊紋章を与えられており、「Boys in Black」という別名がある。



ベトナムで戦ったオーストラリア軍の兵士たち

王立オーストラリア連隊編 ②

ベトナム戦争におけるオーストラリア軍の活動を取り上げるシリーズ、今回は2RARの略称を持つ王立オーストラリア連隊第2大隊です。

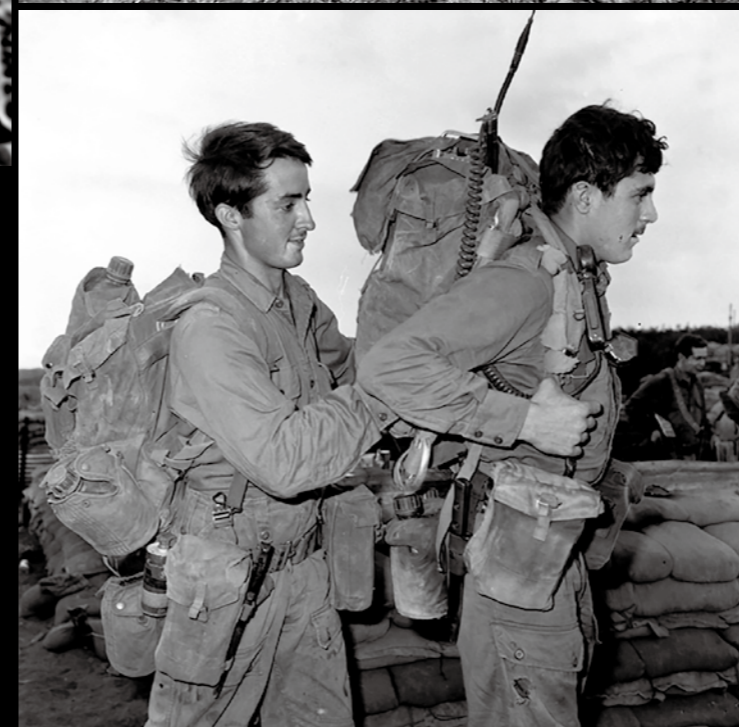
文／鈴木健太郎 写真／AUSTRALIAN WAR MEMORIAL, NARA, WPPアーカイブ



(上左) ベトナムでの戦闘を想定した訓練施設、通称ベトコンビルレッジを上空から捉えた写真。この施設はオーストラリア東部のロックハンブトンに作られ、建物とその周辺には本物を模したブービートラップが仕掛けられていた。この写真では全く見えないが、2RARの兵士たちが既に仮想敵として潜んでいる。(上右) ベトコンビルレッジでの対ゲリラ戦訓練を行う2RARの兵士たち。仮想敵役の兵士も2RARの所属で、訓練の様子を楽しげに見つめているのはオーストラリア北方軍の高級将校である。後方に写っている兵士たちの中には興味深いことにベトナム人農夫の姿を模した者もいる。



武器と装備品のアップ。L1A1のストックには包帯がテープで留められているが、この場所であればおそらくチークパッドとしても役立つはずである。オーストラリア軍のリュックサックはアメリカ軍のライトウェイトリュックサックやトロピカルリュックサックと異なりフレームが備えられていない代わりに分厚いパッドが縫い付けられていた。



(上左) ナイダットのベースキャンプにおける2RARの兵士たち。彼らは出撃前で、ヘリコプターが到着するまで最大限に身体を休めている最中らしい。武器はL1A1とM16の双方が見られ、右端には既に出撃準備を整えた者もいる。(左) 出撃準備を整える2RARの兵士たち。2人ともオーストラリア軍のリュックサックを背負っているが、良く見ると右の無線通信手はライトウェイトリュックサックのフレームを組み合わせている。腰に見える大型の弾薬ポーチはオーストラリア軍制式品のP44で、左の兵士は銃剣を差すループが付いた左腰用のポーチを右腰に付けている。(右) CH-47ヘリコプターに乗り込むために整列する2RARの兵士たち。CH-47はオーストラリア軍では1974年まで就役していないため、このヘリはアメリカ軍所属と思われる。





第1回 アメリカ国内 メジャー・マッチ参戦までの道

～キャリア・オブティクへの挑戦。ダット・サイトの使い方をマスターする～

2011年に単身渡米し、様々なシューティング・マッチへ参戦しながら、実銃射撃世界を目指してチャレンジを続ける鮫島宗貴氏。異国の地で様々な手続きを行ない、練習を重ね、コンディションをキープして試合に挑むということは決して簡単なことではない。今月から、アメリカ国内メジャー・マッチ参戦までの道のりを、鮫島氏の経験からリアルに語ってもらう「特別編」をお届けします！



限られた情報

アメリカで実銃を使用して開催されるシューティング・マッチへ出場する……これは、かつて多くのエアソフトガン・シューター達が目標、あるいは夢としたことだ。僕が日本でエアソフトガンの試合に参加していた頃も、その先に見ていたのは、アメリカを始めとする世界のシューティング・アスリートと達と競うことだった。しかし、海外で射撃の試合、それも実銃を使用してとなると、やはり敷居は高い。最初のハードルは“情報”だった。海外での射撃の試合へどうやって参加するのか？ 当時はインターネットの検索エンジンでも出てくる情報に具体性はない。もちろん、旅行会社が斡旋を行なっているなんてこともない。見つかる情報はせいぜい観光レンジでの体験射撃程度のものだ。2024年現在、インターネットはどんどん進歩し、現在は各種SNSを探せば実銃を使用した試合

の映像が山のように出てくる。場合によっては、ライブ中継も見ることが出来る時代だ。しかし、それでも日本人にとって海外で射撃の試合へ参加する為の具体的なHow Toの情報はかなり限られている。かつて本誌でマッチの結果や試合の様子は紹介されていたが、どうやって試合へ出場するのか？ という生の情報は少なかったように思う。そこで、今回は、今年の6月に開催されたUSPSA キャリー・オブティク・ナショナルズ（全米選手権）へ僕が出場するまでのリアルなレポートを数回に渡ってお送りしていこうと思う。

USPSAナショナルズへの出場方法

USPSAは、毎年複数のナショナルズ（全米選手権）を開催している。現在のUSPSAは、ハンドガンだけで8個も部門が存在し、その内の1つはプロヴィジナル（仮）部門となっている。そういう状況なので、

8個もの部門を1つの試合として開催すると、各部門の参加人数が小さくなってしまふ。なので、大抵の場合は、2～3つの部門を組み合わせ、3種類のナショナルズが開催される。例えば、ルールでダット・サイトの使用が許される部門だけを組み合わせたりすることもあれば、装弾数に制限のある部門を組み合わせるケースも多い。常に化するトレンドに応じてUSPSAは、毎年のように試合運営方法を変えてきた。そんなナショナルズだが、出場する上で最も簡単な方法は、一般受付がオンラインで開始されると同時に申し込むことだ。しかし、これは招待出場枠であるスロットを獲得したシューター達が何らかの理由でそれを放棄した余りの出場枠を取る方法であり、人気のあるナショナルズの場合は、競争倍率が異常に高い。2022年から1つの部門単独で開催されているキャリア・オブティク・ナショナルズ

だが、僕が2022年に参加した際は、この一般受付での参加登録を行なった。僕が申し込みをした時点で既にキャンセル待ち。しかも、受付が始まってから数週間後に申し込みを行なったので、参加出来る可能性は低いと見積もっていた。だが、試合まで残り1ヵ月という段階で、USPSA本部から出場枠に空きが出たとの連絡を受け、その年はギリギリで参加することが出来た。昨年はその経験から一般受付がオープンしたと同時に申し込みを行なう計画を立てていたが、僕の勘違いからオンラインでの受付時間を過ぎてしまい、約40分遅れての申し込みとなった。当然、一般受付に回されたスロットは既に売り切れ。僕はまたしてもウェイトリストへの登録となった。2022年は数週間後に登録しても参加出来たことから、僕は数週間も待てばスロットに空きが出ると高を括っていた。だが、待てども連絡は来ない。そこで、USPSA

リオ・サラド・スポーツマン・クラブで開催されるUSPSAレベル1ローカルマッチの1コマ。ローカルマッチの役割は様々だ。初心者を受け入れる器になっているだけでなく、上位のシューター達にとっては、全米選手権への出場枠を取る為にポイントを稼ぐ場でもある。試合には老若男女問わず多くの人が参加する。銃や射撃好きにとって居心地の良い場所である。

フレームに20mmサイズの金属製アクセサリ・レールを装備。コンパクトなフレーム・サイズに合わせたレールは小型アクセサリ専用だが、通常サイズのアクセサリに対応するWAならではのアイデアが盛り込まれている。

タン アームズ (以下、WA) では、これまで様々な素材とデザインで、豊富なバリエーションを製作。どのモデルもS&Wらしい個性を正確に再現し、マグナ系列ではハイスピード・ブローバックと迫力のキックで、S&Wオート・ファンを満足させてきた。今月はそんなWAのM4013TSWに新鮮なバリエーション、ソリッドなムード溢れる2トーン・モデルが新登場する。

S&Wパフォーマンス・センター・カスタムを彷彿とさせるパネル・カットを施したフレームとスライドは、重量と硬質感に定評のあるCBHW。全体にプラストショットを施してマットグレーに整えた後、パネル・カット部分を残して両側面を入念にポリッシュし、適度な粗さのヘアラインでフィニッシュしている。ポリッシュされた部分の沈んだシルバーが金属の冷たさを感じさせ、同時にソリッドなイメージを醸し出す。全体に漂う金属モデルの重厚さが、ポリマー・フレーム・モデルとは一線を画すM4013TSWの新鮮な魅力を感じさせてくれる。

タイム・ブルーフされたマグナメカが生み出すハイスピード・ブローバックと、鮮烈な印象を残す巧みなフィニッシュのM4013TSWニュー・モデル。S&Wセミオート・ファンは、是非この1挺をその手に握ろう!!

トナムの戦場に投入されたシールズのMk.22モッド0 (サイレンサー・タイプのM39)、そして警察関係での採用などが市場での信頼性を築き上げた。1964年にはダブル・カアラムのM59を開発して一世を風靡。S&Wダブルアクション・オートの存在が世界中に知られるようになり、後に多数のバリエーションを生み出すことになった。

M4013TSW (タクティカルSW) は、M39を源流にする最終系列ともいえるサブコンパクト・モデル。40SWカートリッジを使用するショーティ・フォーティのタクティカル・シリーズだ。1990年代後半頃から作られるようになったアクセサリ・レールを装備し、S&Wパフォーマンス・センターがデザインした各種のバリエーションが作られてきた。カリフォルニア・ハイウェイ・パトロール (C.H.P.) が、この系列のM4006TSWを特注して採用していたことでも知られている。

固定スライド・エアソフトガンの時代からショーティ・フォーティをモデル・アップしてきたウエス



ダブル・タイプのリコイル・スプリング、強力なバッファー・スプリング、そしてラバー・バンパーなど。サブコンパクトらしいブローバック・スピードと強いキックを実現する様々な工夫が凝らされている。

ダブル・カアラム・モデルながらストレート・ストラップのワンピース・パネルと、マガジンにセットされたフィンガー・レストが安定したグリップングを提供してくれる。

アクセサリ・レールはサブ・シャーシに2本のスクリューでしっかりと固定されている。

スクリューの位置を変更するとレールが前方に約5mm突き出す。これで市販アクセサリの多くに対応可能なサイズになる。



●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
 ◎タナカ・ワークス
<https://www.tanaka-works.com>

S&W M10 Military & Police 2inch .38 Special Square Butt Heavy Weight Ver.3 MODEL GUN

and SIG P226 Railed Frame Evolution.2 ALL Heavy Weight MODEL GUN

※撮影用のモデルはプロトタイプのため、量産品とは仕様と異なる場合があります。



SMITH & WESSON M4013TSW CBHW Ver.



Militaria Roundup!

ベトナム戦争のヘリ・クルー・ユニフォームと40mmグレネード・ベスト

ベトナム戦争はヘリボーン作戦を発展させ、さらには兵器と装備の開発に大きな影響を与えた。今回はベトナム戦争を象徴するヘリコプターのクルーが着用したユニフォーム、そして同じくベトナムの戦場での経験から開発された40mmグレネード携行用のグレネード・ベストを紹介しよう。

解説/ 菊月俊之 写真/ 青木健格

撮影協力/ 中田商店 ☎03-3823-8577 <https://www.nakatashoten.com>、サムズミリタリ屋 ☎03-6680-4648 <https://www.sams-militariya.com>

アメリカ陸軍航空とヘリコプター

1947年7月26日、アメリカ政府は国防法を制定して軍組織を改編。同年9月18日には陸軍航空隊が「空軍」として独立が認められ、機材、人員、記録の一切を陸軍から移管されることになった。これにより陸軍航空機の任務は、戦場での死傷者の搬出と後送に限定。また保有する航空機も重量1,134kgまでの固定翼機と、重量1,814kgまでの回転翼機（ヘリコプター）の2種類に限定されている。

アメリカ陸軍はベトナム戦争でヘリコプターを活用し、空中機動（エアモビール）という新戦術を生み出した。ヘリコプターが注目されたのは朝鮮戦争（1950～53年）で、陸軍ヘリコプターは負傷兵の後送や輸送任務に活躍。陸軍はより多くのヘリコプターを保有することを望んだが、機体重量と役割の制限から空軍との間に論争が発生。その結果、機体は重量ではなく機能に限定することで合意が成立。兵員、装備、物資の空輸は戦域内約160kmまでが陸軍航空の役割とされた。



AH-1G コブラ

AH-1はベル社が独自開発した世界初の攻撃ヘリで、兵員輸送ヘリを対空砲火から護る必要性を受けて1966年に採用。67年からベトナム戦争に投入されて対地攻撃に威力を発揮した。機首のターレットに7.62mmミニガン1挺と40mmグレネード・ランチャー1挺を搭載し、機体側面には2.75inロケット弾やTOWミサイル等を搭載した。乗員は2名で、前席が射手で後席が操縦士。(Photo:U.S.Army)

ベトナム戦争のヘリボーン作戦

ヘリコプターの機動性と柔軟性を活かしたヘリボーン作戦はベトナムで効果をあげ、その作戦はサーチ&デストロイ（索敵・殲滅）が主体となっていく。この作戦は軽装備の歩兵が北ベトナム軍やベトコンの所在を索敵発見し、これを空中機動した兵力で攻撃するもので、ロケット弾搭載ヘリが砲兵の役割を担った。

ベトナム戦争における陸軍空中機動部隊が使用したヘリコプターは①偵察（スカウト）②汎用（スリック）③攻撃（ガンシップ）の3種類だった。戦争初期に汎用ヘリは部隊の輸送に活躍したが、着陸直前と離陸時に攻撃を受けると脆弱さを露呈した。このためヘリボーン作戦では着陸地点（Landing Zone/LZ）の制圧が必須で、そのために武装ヘリが開発された。最初は汎用のベルUH-1イロコイスに機関銃やロケット弾を搭載したものを使用した。1967年からベル社が開発した世界初の攻撃ヘリAH-1Gコブラがベトナムに配備されている。

そしてAH-1Gは偵察ヘリOH-6ローチとペアで“ハンター・キラー”チームを組み、索敵・攻撃作戦に威力を発揮する。“ハンター”のOH-6は低空でゆっくり飛行し（高度約3mで時速約20～26km/h）、目標を発見したら発射弾でマーク。これを上空（高度約460m）の“キラー”AH-1Gが急降下して攻撃する。しかしOH-6は低空を低速で飛行するため、攻撃を受けて損傷、墜落することが多かった。また戦争末期に共産側がソ連製の赤外線誘導ミサイルC9K32 ストレラ（NATOコード SA-7グレイル）を使用し始めると、目立たないように目標に接近する戦術を取るようになっていく。



第11空中襲撃師団章

空中機動は車輛の代わりにヘリコプターを使用するもので、部隊の機動力を大幅に向上させた。陸軍は1963年に第11空中強襲師団を編成してテストを実施し、その有効性を確認。65年には第1騎兵師団（空中機動）が編成され、ベトナムの戦場で空中機動の有効性を発揮している。写真はアメリカ国内で訓練中の第1騎兵師団。機体は汎用のUH-1 イロコイス。(Photo:U.S.Army)

空中機動作戦の誕生

1962年に国防長官ロバート・マクナマラは陸軍の機動性研究のため、ジョンH.ハウズ大将を長とする戦術機動性要領委員会（ハウズ委員会）を招集した。委員会は空中機動の概念の研究を行ない、完全な空中機動能力を持つ師団の編成を勧告。これを受けて第11空中強襲師団（11th Air Assault Division）が63年に編成され、空中機動のテストを実施。65年に同師団と第2歩兵師団を母体として第1騎兵師団（空中機動）が編成され、ベトナム戦争に投入されている。

これに対し空軍は、陸軍が独自に「戦術空軍」を編成しようとしていると反発。陸軍参謀総長ハロルドK.ジョンソン大将と空軍参謀総長ジョンP.マッコネル大将が交渉を行ない、陸軍は特定機種の固定翼機と戦術空輸用の固定翼機に対する全ての要求を放棄し、陸軍が保有するそれらの機体を空軍に移管。そして空軍は戦域内での移動、火力支援、補給のために運用される回転翼機（特殊航空作戦用と救難用を除く）に対する全ての要求を放棄することで合意（ジョンソン・マッコネル合意/1965年）した。

OH-6 カイユース

OH-6は目視による観測、目標発見、連絡、指揮を任務とする軽観測ヘリで、1969年12月からベトナムに投入された。一般に“ローチ（Loach/ドジョウ）”と呼ばれたが、これは軽観測ヘリ（Light Observation Helicopter）の頭文字“LOH”に由来。飛行性能と信頼性から兵士たちに好評で、AH-1Gコブラとのハンター・キラー作戦に活躍したが、対空砲火による損害も多かった。(Photo:U.S. Army)



ヘリコプター・クルー・ユニフォーム SHIRT & TROUSERS, FLYER'S HOT WEATHER, FIRE RESISTANT

我が国では一般にヘリコプター・クルー用と呼ばれる2ピースのユニフォームだが、これはベトナム戦争中に陸軍ヘリコプターのクルーが着用していたことに由来する俗称。本来はアイテム名の“フライヤーズ”が示すように飛行服で、固定翼機と回転翼機の搭乗員によって着用されている。

アメリカ陸軍が熱帯気候のベトナムで着用する飛行服の開発に着手したのは1966年で、何より重視されたのは飛行兵を被弾等による航空火災から護ることだった。特にヘリコプターは地上砲火で被弾損傷することが多く、乗員の保護は切実な問題だった。当時陸軍の飛行兵が着用していたフライング・スーツはK-2Bフライング・カバーオールだったが、耐火能力は限定的だった。

1965年、在ベトナムアメリカ陸軍コンセプトチーム（Army Concept Team in Vietnam/ACTIV）は海軍が開発したノームックス（デュボン社が開発した難燃性のポリアミド繊維）を使用したフライング・カバーオールをベースにスーツを開発。テストの結果ノームックス製スーツは十分な耐火性を持つと判断され、66年に試作スーツ95着がベトナムでテスト使用されることになった。

しかしカバーオールは動きが制限されるとして不評で、皮膚の痒みと炎症を生じる問題があった。これを受けてデュボン社は布地の織り方を改良し、これを使用したカバーオール、そしてシャツとトラウザーズで構成される飛行服が試作される。そして1967年3月に500セットがベトナムに送られ、再度テストが行なわれた。その結果2ピースのタイプが選択され、10月からベトナムの陸軍航空部隊への支給が開始されている。



一般にヘリ・クルー用と呼ばれるフライヤーズ・シャツ。フライング・スーツはカバーオールが一般的だが、動きやすさが重視されてシャツとトラウザーズの2ピース式が採用された。被弾等による火災からの保護を重視し、素材には難燃性のノームックス・ナイロンを使用した。ベトナムの気候では通気性が不十分なため暑さを感じることが多かったという。色は陸軍ユニフォームと同じOG（オリーブ・グリーン）107。2ピースのフライング・スーツは少数が海軍や海兵隊によっても着用されたといわれる。(撮影協力：サムズミリタリ屋/HVN戦 米軍ヘリ・クルー用ジャケッTC/価格 第11機甲部隊 9680円)



シャツ背面は一枚布でヨークは付かない。ベトナム戦争当時ヘリ・クルー・ユニフォームは需要が供給を上回っていたため、スーツの支給で最優先されたのは観測、汎用、攻撃ヘリのクルー。次が輸送ヘリ、観測連絡機L-19バードドッグ、偵察・近接支援機AO-1モホーク搭乗員、その次が汎用固定翼機の搭乗員だった。



ベトコンのメンバーを連行するために待機中のUH-1ヘリコプター。右端の兵士がヘリ・クルー・ユニフォームを着用しているが、暑さ対策のためシャツの裾を上に出している。本来シャツの裾はトラウザーズの中に入れて着用するが、これは耐火性を損なわないための措置。(Photo:U.S.Army)

シャツおよびトラウザーズの素材は4.4オンスのノームックスで、試用テストでは背中を2層にしたものも作られたが、これは航空火災では火の中から脱出する際に背中に火傷を負うことが多いが理由。しかしベトナムにおけるテストの結果、採用されたのは裏地のないタイプだった。

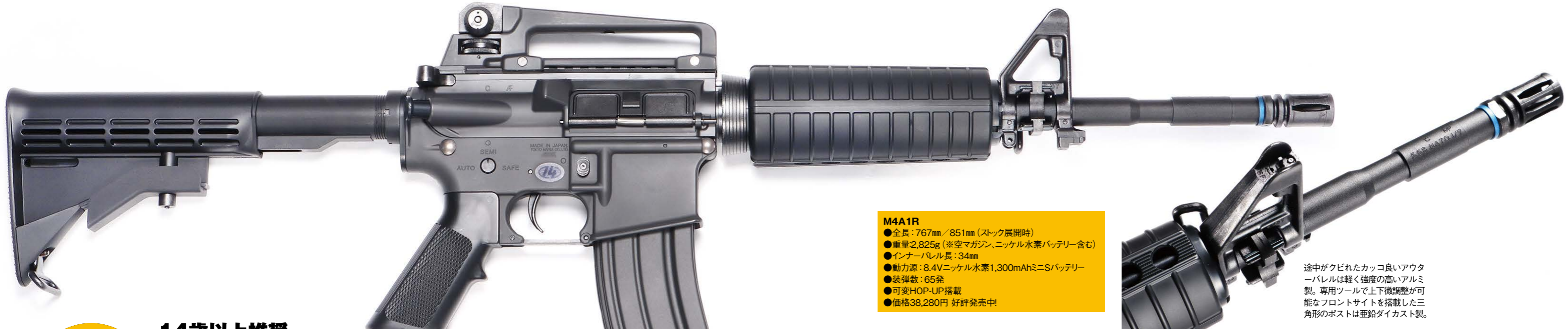


インストラクション・ラベル 左胸内側に縫い付けられたインストラクション・ラベル。薄くて読みづらいが「アウトターとして着用すること。袖は常に下にして着用する。裾はトラウザーズの中に入れること。」等の指示とクリーニングに関する注意事項が記載されている。素材は100%ポリアミドとあるが、100%耐高熱ナイロンと表記したものが存在。



ショルダー・スリーブ・インシグニア (SSI) 右肩のSSIは第11機甲騎兵連隊“ブラック・ホース”のもの。第11連隊のフルカラー版SSIはシールドが斜めに分割（紋章学では“Per Bend”と呼ぶ）されているが、写真のローカルメイト版は省略している。第11連隊は機甲部隊だが、編制の中に航空騎兵中隊（Air Cavalry Troop）を含んでおり、写真のシャツは同中隊の兵士が着用したと思われる。第11機甲騎兵連隊は1901年に第11騎兵連隊として創設され、フィリピン・アメリカ戦争中の1902年にセブ島に派遣。その後はメキシコ遠征（1916～17年）、第2次世界大戦（1939～45年）のヨーロッパ戦線に従軍した歴戦部隊。創設後に数度の改編を経て63年に機甲騎兵連隊となり、M48バットン戦車とM551シェリダン軽戦車を装備。1966年に南ベトナムに展開し、71年3月に撤兵した。





M4A1R
 ●全長: 767mm / 851mm (ストック展開時)
 ●重量: 2,825g (*空マガジン、ニッケル水素バッテリー含む)
 ●インナーバレル長: 34mm
 ●動力源: 8.4Vニッケル水素1,300mAhミニSバッテリー
 ●装弾数: 65発
 ●可変HOP-UP搭載
 ●価格38,280円 好評発売中!



途中がクビれたカッコ良いアウターバレルは軽く強度の高いアルミ製。専用ツールで上下微調整が可能なフロントサイトを搭載した三角形のポストは亜鉛ダイカスト製。



**14歳以上推奨
 電動ガンRシリーズ第1弾**

M4A1R

Photo & Text by Takeo Ishii
 東京マルイ ☎03-3605-1113
 www.tokyo-marui.co.jp

1/1リアルサイズ・重量感・実射性能はそのままに、 安心&安全をさらに深めた14才以上推奨 電動ガンRシリーズ登場!

電動ガン/スタンダードタイプのベストセラー「コルトM4A1カービン」が、14才以上推奨の電動ガンRシリーズ第1弾「M4A1R」に!
 青少年育成条例の安全基準を満たす「0.135J未満」の発射パワーながらサバイバルゲームを存分に楽しめる命中精度と飛距離を実現!
 外観パーツには18歳以上用と同等の各種金属素材も採用! 17歳以下の青少年でも実銃さながらの質感・重量感が楽しめる!



青少年育成条例の安全基準を満たす「0.135J未満」のパワーでありながらシューティングやサバイバルゲームを充分楽しめる性能を実現したメカニズムバランスの維持および安全への配慮から、通常分解(テイクダウン)は行えない仕様になっている。



外観やサイズ、重量に関しては18歳以上用スタンダード電動ガンと何ら変わらないが電動ガンRシリーズ共通のコンセプト。実銃同様の本格的な6段階伸縮式ストックはむしろ、成長期にあって体格が刻々と変化する14~17才のユーザーにこそ重要な機能かも。

お子様用に歩み寄らず「大人の趣味の手強さ」を青少年に教えてくれる電動ガン

現在アメリカ四軍(=陸軍、海軍、空軍、海兵隊)で制式採用されているM4A1カービン。毎日のように発信される実際のニュース映像や写真資料はもちろん、現代を舞台にし米軍が登場する作品であれば、映画、ドラマ、ゲーム、小説には必ず、そして多数が登場し、世界中の銃器ファンの目に触れる

のだから、その圧倒的な人気は「当然であり必然」なのだ。そんなM4A1がこの度、14才以上推奨の電動ガンRシリーズ第1弾として登場! 青少年育成条例の安全基準を満たすパワー「0.135J未満」でありながら、サバイバルゲームやシューティングマッチを楽しめる命中精度と飛

離を実現! というコンセプト自体は先行で発売されている「電動ガンBOYS」や「電動ガンLIGHT PRO」と同じだが、電動ガンRシリーズでは「0.135J未満」の発射パワー以外「まったく子供向けに寄せていない」点が最大のポイント。外観パーツには「スタンダード電動

ガン/コルトM4A1カービン」と同様、樹脂以外にアルミ(アウターバレル)、亜鉛ダイカスト(本体多くのパーツ)、スチール(マガジンアウター)等の各種金属素材を多様に採用し、実銃さながらの質感・重量感を17才以下のユーザーでも安心して楽しめるハイエンド・アイテムとなっている。



M4A1Rには最後の1発まで確実にチェンバーに送り込み発射可能な新型フォロワーを搭載したマガジンが付属。装弾数は従来の「M16用スタンダードマガジン」よりフォロワーの長さ分(=3発)だけ減った「65発」となっている。





月刊

THE GREEN BERET SPECIAL FORCES CIF COMPANIES

vol.62

Part 10

文・イラスト/DJちゅう
写真/U.S.ARMY

特殊部隊CIF中隊特集パート10

これまでCIFの伝統的な任務や、名称変更のあれこれ、設立までの歴史などを紹介してきましたが、今回はまだ触れていなかったCIFパッチの解

説です。CIFを追っていると彼らが身に着けているのを高確率で目にする印象的なあのシンボルに迫ります。そして後半では度々議論されているグ

リーンベレーのレギュラーチームとCIFチームの見分け方を“僕なりの視点”で解説しています。今月も最後までぜひお付き合いくださいませ〜！

参考文献 AWS INC [https://awsin.com]、チリ陸軍 [Ejercicio Pacific Dagger 2024]、SOFREP [Blue Light Part 1 ~ 9]: From the Special Forces, America's first counterterrorism unit], AMERICAN SPECIAL OPS [Special Forces CIF Companies], jackmurphywrites.com [SPECIAL FORCES TO DISBAND THE COMMANDERS-IN EXTREMIS-FORCE(CIF)], GO ARMY.COM [CAREERS & JOBS]

